

都道府県別賞一等

つながる幸せ

佐賀県 佐賀大学教育学部附属中学校 二学年

伊藤 陽仁

何の作文を書こうかと決めようとした時、私は声も出せず、つらそうな母の姿を思い出した。

私が小学生の時、母が難病にかかった。母はとてもつらそうで、その時の私は母の姿に不安を感じていた。幼いながら、少し冷たい手から感じる違和感に、とても恐怖を感じていた。『あの時は、運動会に来て、応援もしてくれたのに……』『つい最近まで私と遊んでいたのに……』たくさんの感情がどこからともなく出てきて、胸が苦しくなっていた。

昔から母は、体が少し弱い人らしい。体調がとても悪化したため、検査入院を何度かしたそうだった。母が検査入院するたび、不安な気持ちと共に地獄のような生活を送っていた。まず、朝。寝坊し、前日の洗濯が遅くなり、服が乾いていなかった。そのため、ご飯も食べずに、すぐに学校へ行った。帰宅した後も、食器洗い、洗濯、夜ご飯の準備、次から次に襲い掛かるタスクに押しつぶされそうになった。

あの頃は『お母さん大丈夫かなあ。』ということ以外は特に頭の中になかった。しかし、今、お小遣いが増えて、お金を使うようになったり、国の仕組みを勉強し、お金について考えるようになったりして、入院する際にかかるお金は少なくはないはずだと思った。生活がきつくなかったのか父に聞いてみることにした。聞いてみると、医療保険の存在を教えてくれた。また、私や私の周りの人も使っていることも教えてくれた。

保険とは「万が一の時のお金の備え」である。保険加入者が毎月、もしくは毎年、少しずつお金を出し合って、病気や事故などの時に、そのお金から保険金が支払われるシステムだ。父は「貯金箱を共有しているようなものだよ。」と、教えてくれた。

母に、その時の話を聞いてみた。母は、自分の病気がとても悪いものだったらどうしようと思っていただけでなく、家族に負担をかけるという申し訳なさもあったそうだった。しかし、「保険の存在がたくさんある不安の一つの要因をなくしてくれ、精神的にとっても助かった。」と、言っていた。

母の病気の対処法が少しわかり、私や周りの人がみんな使っている保険がなければ今のような生活はできていなかった。私たちが保険に加入して自分以外の救える命もあることにも気付いた。私が部活でひどいケガをしても、親が

第63回中学生作文コンクール

重い病氣にかかっても、安心して暮らせるために保険があるのだと思った。私は母の病氣というつらい体験を通して、保険の大切さに気付いた。そして、今の安心した生活が、多くの人に支えられていることを知った。将来、私も誰かを救い、支えになれるような人になりたい。